

[特別支援教育]

児童の「主体性」をはぐくむ合同学習の取り組み

－合同学習「うた・リズム」の実践から－

若林 健一*

1 はじめに

新潟県立上越養護学校は、肢体不自由の児童生徒が通う学校である。2年前の赴任以来、小学部「自立活動を主とするグループ」の学級で、重度重複障害の児童を担当している。本校では、児童一人一人の障害に応じたきめ細かい指導を行うために「自立活動個別の指導計画」を作成し、それぞれの長期目標（年間の目標）・短期目標（学期の目標）を設定している。そして、その目標の達成を目指して、個別学習と合同学習の指導計画を各学期ごとに作成して日々の学習活動に臨んでいる。しかし、これまでは指導計画の作成にあたり、児童の「主体性」をはぐくむという視点に欠けていたため、児童が主体的に活動する場面を設定できないことが少なくなかったようにも感じられた。

小学部「自立活動を主とするグループ」での授業は、個別学習と合同学習という2つの形態に大別される。2限と4限の個別学習は、児童1人を教員1人が担当するマンツーマン形式で行われるものである。3限の合同学習は、複数の児童と、1人のMT (main teacher)、児童ごとのST (sub teacher) によるチーム・ティーチング形式で行われるもので、現在は「ことば」「ふれる・つくる」「うた・リズム」「からだ」「あそび」の5領域が設定されている。とりわけ合同学習においては、チーム・ティーチング形式の指導を生かすため、児童の実態や学習の進め方について、担当教師で情報交換することが重要な意味をもっている。しかし、これまでは児童の「主体性」に着目した話し合いが行われることは少なかった。そのため、児童が課題に関心をもって主体的に活動できる場面が個別学習よりも少なく、受動的な活動に偏ることも多かった。児童が主体的に活動に取り組むことを通してこそ、合同学習を充実させ、それぞれの目標達成に向けて前進することができる。また、身に付けた知識や技能を日常生活に生かすためにも、児童が主体的に活動する姿勢が必要である。そこで、「主体性」をはぐくむことを目指して、合同学習の見直しを開始した。

2 研究の目的

本研究では、合同学習「うた・リズム」の授業において、児童の「主体性」をはぐくむという視点に立ち、児童が主体的に活動することができる学習を構築するために必要な要素を明らかにすることを目的とする。

3 研究の方法

上記の目的を達成するために、児童が主体的に活動することができる学習を構築するために必要な要素として、次の5項目を仮定して、平成18年度1学期から3学期までの合同学習「うた・リズム」の授業で実践に取り組んだ。

(1) 児童の実態について共通理解を深める。

合同学習に参加する児童全員の障害や目標について、各学期の「自立活動個別の指導計画」や前学期までの「うた・リズム」の記録や評価を参照しながら、担当教師の間で十分な情報交換を行い、共通理解を深める。

(2) 児童の「主体性」をはぐくみ、目標達成に迫ることができる学習内容を工夫する。

児童の実態を踏まえた題材目標と個人目標を設定して、児童の「主体性」をはぐくむという視点から、主体的に活動できるような学習内容を工夫して、その目標達成に迫ることができるようにする。

(3) 児童の実態に適した教材教具を工夫する。

肢体不自由の児童が使うことができる教材教具を採用したり、必要に応じて改良したり、自作したりする。よりよい学習環境の整備にも配慮して、児童が見やすく使いやすいうように教材教具の設置や提示を工夫する。

* 新潟県立上越養護学校

(4) 「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を活用して、チーム・ティーチングでの連携を図る。

本校研究推進委員会で策定した「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を活用して、チーム・ティーチング形式の授業の中で、MTとST全員がどの児童に対しても適切な支援ができるようにする。

(5) 定期的な情報交換で、学習した内容を次回の授業や日常生活に生かせるようする。

毎回の授業を振り返り、所定の用紙に記録してMTが集約する。また、次回の授業で反省を生かせるように定期的な情報交換を行い、学習内容や支援の改善を重ねる。そして、日常生活に生かせるように連携して指導する。

4 平成18年度1学期 合同学習「うた・リズム」の実践

(1) 題材名 遠足に行こう！

(2) 題材目標 ①好きな音や曲を見付け、身体を動かしたり、じっと聴き入ったりして楽しむ。

②提示されたものや相手に注目して、教師や友達とやりとりをしたり、触れ合ったりする。

(3) 展開

	学習の流れ	期待する児童の姿
導入	○挨拶と始まりの歌 『うたリズムだ、たんたんたん』	・MTを見て、発声や拳手などの動作で挨拶をする。 ・始まりの歌に合わせて、教師と一緒に身体を動かしたり、タイミングよく手拍子をしたりして楽しむ。
展	○触れ合い遊びで、仲良くしようね！ 『♪あくしゅでこんにちは』	・歌詞にあった動き（握手・挨拶など）をして、教師や友達と触れ合いながら歌を楽しむ。
開	◎みんなで遠足に行こう！ 『♪遠足に行こう』	・相手に注目して、働きかけに応えたり、自分から手を伸ばして相手に触れようとしたりする。
	◎水族館の仲間たちに変身しよう！ 『♪水族館のうた』	・リュックの中にある手作り楽器（お弁当・おやつ・おしぼり・水筒など）をよく見て選択する。 ・歌に合わせて教師と一緒に楽器を鳴らしたり、緩急をつけた車椅子の動きを楽しんだりする。
まとめ	○ゆったり鑑賞タイム 『♪ニモのサントラ』	・はてなボックスの中から水族館の仲間たちが描かれた絵カードをひき、お面をかぶって変身する。 ・教師の動きに注目して、歌に合わせたポーズの模倣を楽しんだり、楽器を鳴らしたりする。
	○終わりの歌と挨拶 『♪さようならみなさん』	・セラピーマットで横になり、ゆったりと曲を聴きながらパラシュートで表現される水の動きを見る。
		・終わりの歌に合わせて、教師と一緒に身体を動かしたり、タイミングよく手を振ったりして楽しむ。 ・MTを見て、発声やお辞儀などの動作で挨拶をする。

(4) 題材の工夫

① 新年度の授業スタート

小学部「自立活動を主とするグループ」2学級6名（男子1名、女子5名）の児童による合同学習である。新たに担当する児童も多かったが、各学級で前年度までの記録や評価を読み合い、児童理解を深めた上で授業に臨んだ。

授業の始まりには、年間を通して『うたリズムだ、たんたんたん』の曲を歌うことにした。毎回繰り返すことで、児童にとって親しみのある歌となり、時間や教室が変わっても、児童は「これから楽しい「うた・リズム」が始まるんだな。」という意識をもつことができるようになった。こうして安心して授業に臨めることは、主体的な活動を引き出すための基本となった。これまで静かに歌を聞いているだけだった児童も、緊張がなくなったのだろうか、夏休みが近付く頃には、教師の手本を見ながら歌に合わせて「タン・タン・タン」と自然に手拍子が叩けるようになった。

② 「春の遠足」をテーマにした授業づくり

学習内容は、1学期の学校生活や学校行事と関連した内容にすることで、児童の関心を高め、主体的に活動できることを目指した。そこで、児童が楽しみにしている「春の遠足」を取り上げて、題材を組み立てることとした。毎年春の遠足では、市内の水族館へ出かけている。授業では、荷物を持って出かけて、様々な魚たちと出会い、友達とふれ合って楽しむ、という当日と同じ流れで展開することにした。ストーリー性をもった授業として、児童が「春の遠足に出かけるんだ。」という意識をより強くもって活動に取り組むことを目指したのである。そうすることで、「次は

魚たちの出番だね。」と展開を見通して教えるなど、流れを意識して活動に取り組む姿が多く見られるようになった。

まず、児童はリュックサックの中から手作り楽器（お弁当・おやつ・おしぼり・水筒等）を選択して、『遠足に行こう』の歌に合わせて楽器を鳴らす活動に取り組んだ（図1）。以前はすぐに飽きてしまい、1つの楽器を使える時間は短く限られていた児童たちであったが、遠足の持ち物を自分で選択すると、最後まで大切に持っていることが多かった。「これを持って遠足に行くんだ。」という意識を持てたからだろう。回を重ねるうちに、それぞれお気に入りの楽器が決まるようになり、1つの楽器を持ち続ける時間も増えたので、歌に合わせて自分なりに工夫しながら、主体的に鳴らそうとする様子も見ることができた。



図1 手作り楽器

次は、遠足で見学する水族館を取り上げた。児童は「はてなボックス」の中から魚たちの絵が描かれたカードを選択して、そこに描かれた魚のお面をかぶって変身する。毎回、どの魚が出てくるか分からないため、児童は「今日は何が出てくるかな。」と期待感をもって選択したり、偏ることなく様々な魚に変身したりすることができた。それから、『水族館のうた』に合わせて、水族館の職員を演じるMTを模倣しながら、魚のように身体を動かす活動に取り組んだ。児童がすぐに覚えるように、『水族館のうた』は短い歌詞が繰り返される型の歌とした。また、魚以外にもエイやタコなど動きが分かりやすいものを取り入れて、模倣することに苦手意識をもつ児童でも「自分でもできそうだ。」と発表できるように配慮した。発表を重ねるごとに、児童たちは歌に合わせて楽しく身体を動かせるようになり、秋の学習発表会では、その様子を全校に披露できるまでに成長した。

③ 学習指導案と授業記録の工夫

MTとST全員がどの児童に対しても適切な支援ができるように、学習指導案には、目標達成のための手立てを記入する欄を児童ごとに作成して、すぐ参照しやすいように工夫した。この工夫により、どの児童についても、授業前に適切な支援の手立てをイメージして、準備することができるようになった。授業記録は、目標に照らし合わせた児童の姿が分かりやすいような形式で作成して、それを毎回MTが集約した後、毎週1回の打ち合わせを定期的にもつことにした。打ち合わせのたびに、児童のよかった点や伸ばしたい点、それぞれの児童の支援について不明な点を確認しながら話し合うことで、次回に向けた展望をMTとSTで共有することができ、有意義な打ち合わせとなった。

5 平成18年度2学期 合同学習「うた・リズム」の実践

(1) 題材名 ふしぎなくだもの ～どんな音がするかな～

- (2) 題材目標 ①音や曲を聴いて感じた気持ちを、身体の動きや表情・発声などで表現する。
楽器を自分から鳴らしたり、自分や友達が鳴らす音を意識して聴いたりする。
②提示されたものをよく見て選択する。
教師や友達と進んでやりとりをしたり、触れ合ったりする。

(3) 展開

	学習の流れ	期待する児童の姿
導 入	○挨拶と始まりの歌 『♪うたリズムだ、たんたんたん』	<ul style="list-style-type: none"> ・MTを見て、発声や挙手などの動作で挨拶をする。 ・始まりの歌に合わせて、教師と一緒に身体を動かしたり、タイミングよく手拍子をしたりして楽しむ。
展 開	○触れ合い遊びで、仲良くしようね！ 『♪とんぼのめがね』 ◎いろいろな楽器を鳴らしてみよう！ 『♪ふしぎなくだもの』	<ul style="list-style-type: none"> ・曲に合わせて身体を動かしたり、両手を広げるとんぼが飛んでいるまねをしたりして楽しむ。 ・「ポ」の音で曲が止まるのに合わせて、動きを止めたり友達に触れたりして、音の停止と開始を意識する。 ・畑の中から好きな果物を選択して引っ張り、果物に付いてきたカードと同じ楽器を棚から探し出す。 ・これまで使ったことのない楽器も進んで鳴らし、色々な楽器の中から好きな音を見付けようとする。 ・自分の順番では曲に合わせて楽器を鳴らし、友達の順番ではその音を静かに聞こうとする。

	○みんなのリクエストタイム 『♪ふしぎなはたけ』	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の好きな楽器を見付け、色々な鳴らし方を試しながら音楽的な活動のよさを感じる。 ・児童が好きな曲を持ち寄り、様々な曲想があることを知り、それらの曲に親しむことができる。
まとめ	○終わりの歌と挨拶 『♪さようならみなさん』	<ul style="list-style-type: none"> ・終わりの歌に合わせて、教師と一緒に身体を動かしたり、トーンチャイムを鳴らしたりする。 ・MTを見て、発声やお辞儀などの動作で挨拶をする。

(4) 題材の工夫

① 「秋の収穫」をテーマにした授業づくり

学習内容は、2学期の学校行事の中から「さつまいもほり」を取り上げ、「秋の収穫」をテーマに組み立てることにした。初めに、『とんぼのめがね』で触れ合い遊びを楽しみながら、みんなで果物畑に出かける設定とした。期待感をもって畑に到着すると、りんご・みかん・ぶどう・バナナなど数種類の果物があり、順番に好きな果物を選択して収穫する。すると、果物と一緒に楽器の写真カードが付いてくるので、それを棚の中から探し出し、その時間に使う楽器とした(図2)。これは、児童に色々な楽器を使わせたいという狙いからである。楽器をそのまま提示する方法では、いつも同じ楽器を選択することになりがちである。また、教師が無理にすすめた楽器では、主体的に鳴らすことは望めない。主体的に鳴らそうとする姿勢には、「これは自分で選択した楽器だ。」という事実が必要である。そこで自分の好きな果物を選択して、そこに付いているカードと同じ楽器を探し出して使用するという、ワン・クッション置いた展開にすることで、児童に色々な楽器に触れさせようとしたのである。その結果、果物の収穫を楽しみながら、自分が選択した楽器であると納得して苦手意識のある楽器でも、途中で投げ出すことなく、進んで触れることができたのである。そして、それぞれの楽器の音を楽しむことができたようになったのである。それまで、自分の好きな楽器が決まっており、関心のない楽器には触れようとしなかった児童が、この活動で大きく成長したと言えるだろう。

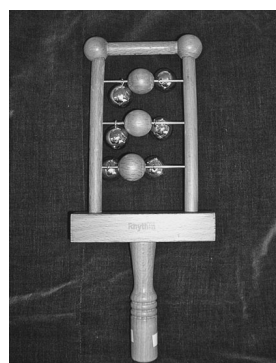


図2 持ち易い楽器

② 「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」の活用した支援方法の工夫

学習指導案の作成にあたっては、本校研究推進委員会で策定した「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を活用して支援方法を工夫することにした。実践ポイントには、下記に示した8つの項目がある。実践ポイントに当てはめながら考えることで、「主体性」をはぐくむという視点を明確にししながら、目標達成のための手だてを工夫することができ有効であった。そして、実践ポイントを共有することで、MTとSTの連携もより深めることができた。

【主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント】

- ア) 子どもたちの興味・関心をはぐくみ、生かすこと
- イ) 子どもたちの長所を生かすようにがけること
- ウ) 子どもたちが楽しいと感じる活動や子どもたちの情動を動かすような体験を取り入れること
- エ) 子どもの実態や能力を把握し、適切な目標設定を心がけることで子どもに成功体験を積み重ねさせること
- オ) 子どもたちが自己選択し、自己決定する場面や活動を取り入れること
- カ) 子どもたちの自発的な言動を待つ姿勢を常に心がけること
- キ) 授業の中で子どもたちが見せる自発的な動きや表情を見逃さずに、柔軟に次の授業や活動につなげていくこと
- ク) 子どもの学習の成果を共感的に評価し、友達同士でも認め合うこと

実践ポイントを活用した支援方法の工夫で、特に有効であったのは次の2つである。まず、「カ) 子どもたちの自発的な言動を待つ姿勢を常に心がけること」である。これまでは、授業を円滑に進行することを優先して、児童の自発的な言動を待つ前に、教師が支援の差し伸べることが多かったように思われる。この題材では、活動する時間に余裕をもち、児童の自発的な言動をじっくりと待つように心がけた。すると、自分の力だけで鳴らそうと頑張った後に満足そうな表情を浮かべたり、教師が支援していた時とは違うやり方で楽器を鳴らそうとしたり、使っていた楽器を自分から友達に貸してあげようとしたりと、児童が生き生きと主体的に活動する場面が増えてきたのである。

次に、「ク) 子どもの学習の成果を共感的に評価し、友達同士でも認め合うこと」である。これまでは、児童の評

価は教師の視点から行われることが多かった。しかし、児童同士の学び合いを大切にする合同学習においては、児童の視点からの評価や、児童同士で認め合う場面が大切にならなくてはならない。STは、言葉で表出できない児童の気持ちをくみ取り、活動の中で代弁することを心がけた。自分の気持ちをくみ取ってもらえた児童の緊張はほぐれ、安心して活動に取り組もうとする姿が増えた。そして、発表の後などには、互いに拍手し合い、STの代弁により児童同士で讃え合う機会を設けた。これが最も児童の心理に働き、「次も頑張ろう。」とする喜びにつながったのである。

③ 支援の振り返りと短期目標の周知

そして、授業の記録に使う用紙にも、「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を踏まえた指導ができたかどうかSTが評価する欄を設けることにした。それをMTが集約して、毎週の打ち合わせの時間に「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を踏まえた支援について、次回の授業でどのように連携するか確認し合うことができたのである。

児童の実態について共通理解を図るために、児童の「自立活動個別の指導計画」を配布しあった。それぞれの短期目標を周知することで、MTとST全員が「なぜこの支援が必要なのか。」という理解を深めることができた。

6 平成18年度3学期 合同学習「うた・リズム」の実践

(1) 題材名 冬を楽しもう！ ～きれいな音探しとあったか手遊び～

- (2) 題材目標
- ①音や曲を聴いて感じた気持ちを、身体の動きや表情・発声などで表現する。
楽器を自分から鳴らしたり、自分や友達が鳴らす音を意識して聴いたりする。
 - ②提示されたものをよく見て選択する。
教師や友達と進んでやりとりをしたり、触れ合ったりする。

(3) 展開

	学習の流れ	期待する児童の姿
導入	○挨拶と始まりの歌 『♪うたリズムだ、たんたんたん』	<ul style="list-style-type: none"> ・MTを見て、発声や挙手などの動作で挨拶をする。 ・始まりの歌に合わせて、教師と一緒に身体を動かしたり、タイミングよく手拍子をしたりして楽しむ。
展開	○季節の歌と触れ合い遊び 『♪こすれこすれ』 『♪手と手を合わせて』 ◎きれいな音を合わせよう 『♪しずかなかかねのね』 ○みんなのリクエストタイム 『♪みんなの好きなうた』	<ul style="list-style-type: none"> ・代表の児童が箱の中からカードを1枚引き、そこに書かれた曲で触れ合い遊びをすることを覚える。 ・曲に合わせて身体を動かしたり、一緒に遊ぶ友達を決めて、進んで触れ合ったりして楽しむ。 ・手袋や帽子などの冬グッズの中から好きな物を選択して、付いてきたカードと同じ楽器を棚から探し出す。 ・これまで使ったことのない楽器も進んで鳴らし、色々な楽器の中から好きな音を見付けようとする。 ・友達に聞いてもらおうと楽器を鳴らしたり、友達の発表を聞いて色々な音があることに気付いたりする。 ・和音になるように楽器を選択しておき、曲に合わせて自由に鳴らして、音の響き合いを楽しむ。 ・児童が好きな曲を持ち寄り、様々な曲想があることを知り、それらの曲に親しむことができる。
まとめ	○終わりの歌と挨拶 『♪さようならみなさん』	<ul style="list-style-type: none"> ・終わりの歌に合わせて、教師と一緒に身体を動かしたり、トーンチャイムを鳴らしたりする。 ・MTを見て、発声やお辞儀などの動作で挨拶をする。

(4) 題材の工夫

① 「冬の遊び」をテーマにした授業づくり

2学期の学習を通して、児童は様々な楽器とその音に関心をもち、自分から楽器を鳴らしてみようとする姿勢を育てることができた。その「主体性」をより確かなものとするために、3学期の学習内容は2学期の流れを踏襲して、楽器に対する関心をより深めることを狙った。2学期は「秋の収穫」がテーマにした内容であったが、3学期は児童が楽しみにしている雪遊びに代表される「冬の遊び」をテーマにして、学習内容を組み替えて行うことにした。

授業では、始まりの歌に続いて、これまで同様に触れ合い遊びのコーナーを設けた。ここでは、児童に「冬の遊び」が始まるという期待感をもたせるため、合同学習「あそび」で学習している『こすれこすれ』などの歌を取り入れることにした。実際に雪遊びなどをするのは、合同学習「あそび」の時間である。児童はその印象と重ね合わせながら、和やかな雰囲気の中で友達との触れ合いを楽しむことができた。このことは、児童の期待感を一気に高めたという手応えが感じられた。そして、果物の代わりに手袋や帽子などの冬グッズを用意して、その中から好きな物を選択して、付いてきたカードと同じ楽器を棚の中から探し出し、その時間に使う楽器を決めることにした。児童は2学期の学習をしっかりと覚えていて、「今日はこの楽器を使うんだな。」と納得して、最後まで使おうとする姿勢がより鮮明になった。

② 楽器の工夫と発表タイム



図3 改良した楽器

2学期の題材では、7種類の楽器を取り扱ったが、3学期もそれとは違う7種類の楽器を新たに用意することで、全部で14種類の楽器に触れることができたことになる。児童の力だけで鳴らせる楽器は限られてくるため、使いにくい楽器には、握りやすいような持ち手や引き輪など必要な改良を加えることで、少しでも使いやすいように工夫した(図3)。ドアチャイムを改造して教師が自作した楽器なども進んで取り入れた。また、STは、「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を踏まえて、すぐに手を取って支援せず、児童の自発的な動きをじっくり待つように心がけた。これらのことで、児童がこれまでうまく鳴らせずに苦手意識をもっていた楽器でも、「自分の力で鳴らせるようになった。」という成功体験を重ねることができるようになり、「もっと鳴らしてみたい。」と主体的に活動できる要因となったのである。

また3学期は、友達を意識して楽器を鳴らしたり、音を聞いたりできるようになることを目指した。それぞれの児童が個別に鳴らす練習をした後、みんなで楽器の音を聞き合う発表タイムを設けた。ここでは、発表する児童が自分の力で鳴らしている様子を、他の児童は楽器を置いて静かに聞くようにした。そして、発表が終わると、児童同士が拍手で讃え合い、STの代弁でよかったところを認め合った。教師による評価だけではなく、児童の視点から褒めてもらえることに満足する様子が見て取れ、「自分もできた。また発表したい。」という主体性につながる事ができた。最後には、『しずかなかねのね』に合わせてみんなで音を合わせ、響き合う音をゆったりと聞き合うこともできた。

③ 日常生活での振り返り

日常生活においても、「うた・リズム」の時間に学習したことを振り返りながら指導するようにした。ハンドベルやタンバリンなどの楽器を教室に常備して、休み時間や学級活動に歌を聞く時には、「どの楽器を使いますか。」と選択させ、一緒に鳴らして楽しむことができた。また、曲に合わせて手を叩いたり、身体を動かしたりする姿も多く見られるようになった。写真カードを選択して気持ちを伝える力も、様々な場面で発揮されるようになってきた。

7 おわりに

1年間を通じた合同学習「うた・リズム」の実践を通して、研究の方法で示した5項目に取り組むことにより、児童の「主体性」を大きく引き出せることが分かった。特に「(2) 児童の「主体性」をはぐくみ、目標達成に迫ることができる学習内容を工夫する。」と「(4) 「主体性をはぐくむ具体的な実践ポイント」を活用して、チーム・ティーチングでの連携を図る。」が有効であることが分かった。まず、児童の実態を踏まえた適切な題材目標を設定して、児童が関心を持ち「自分もやってみたい。」と思う学習内容をどのように展開するかが大切である。その際には、児童が安心して、納得して取り組むことができる学習内容でなくてはならない。次に、MTとSTが連携して、児童の主体性を引き出す支援をすることが大切である。どのような支援が適切であるか、全員の児童について共通理解を深めなくてはならない。そして、その根底にあるのは「児童の視点から授業を構成する」必要性である。

8 参考文献

- 遠山文吉 「表現する力を引き出す 一子供の気持ちに寄り添うことによって」 肢体不自由児教育 175 2006
 齋藤一雄 『特別支援教育への第一歩』 明治図書 2004